

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：14303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25820310

研究課題名(和文) 絵図史料を用いた中近世巡礼空間・景観の復元的研究

研究課題名(英文) Study of early modern pilgrimage space and landscape using pictorial historical materials

研究代表者

岩本 馨 (Iwamoto, Kaoru)

京都工芸繊維大学・その他部局等・講師

研究者番号：00432419

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本における巡礼絵図史料について詳細な検討を行い、巡礼地の空間構造および社会構造を明らかにすることを試みたものである。具体的には、1) 観音曼荼羅を用いた中世の西国三十三所巡礼ルートの復元、2) 中世・近世の都市巡礼、3) 近世の伊勢神宮摂末社詣と末社遥拝所、4) 秩父三十四所巡礼の近代的变化について検討を行った。

研究成果の概要(英文)：In this study, I tried to clarify the spatial and social structure of the pilgrimage sites using pictorial historical materials. Specific consideration is as follows. 1) medieval Saigoku pilgrimage, 2) Middle Ages and early modern urban pilgrimage, 3) subordinate shrines of Ise Shrine in the early modern period, 4) the modernization of Chichibu pilgrimage.

研究分野：都市史

キーワード：巡礼 西国三十三所 秩父三十四所 洛陽三十三所 伊勢神宮 摂末社順拝 末社遥拝所 観音曼荼羅

1. 研究開始当初の背景

前近代の巡礼に関する絵図として最も代表的なものとして中世末から近世初頭にかけての札所空間を描いたいわゆる「参詣曼荼羅」群がある。「参詣曼荼羅」の研究は昭和43年の京都国立博物館「古絵図」展、昭和53年の大阪市立博物館「社寺参詣曼荼羅」展を端緒とし、その後は主として3つの流れで進められてきた。第一の流れは記号論としてのアプローチで、描写される事物の丁寧な分析から、そこに籠められている物語や世界観を読み解いていこうとするものである。これには黒田日出男の那智参詣曼荼羅分析や、岩鼻通明による「位相空間」論、西山克の聖地論などの成果がある。これらの読解は非常に鮮やかであるが、一方でそれゆえに参詣曼荼羅をとりまく多様な関係構造が単一化されがちなきらいがあるように思われる。第二の流れは統計学的アプローチで、参詣曼荼羅の図像情報をデータとして整理し、それらを総体として分析を行うものである。これには藤澤隆子による基礎的研究があり、絵図の年代比定などに一定の有効性をもつものといえるが、一方で図像を要素に還元することで切り落とされる部分も少なくない。第三の流れは社会史的なアプローチがある。たとえば下坂守は清水寺参詣曼荼羅の分析から身分論へのアプローチを試みており、美術史的手法とは異なる立場からの参詣曼荼羅研究の可能性を示唆している。近年では上記の流れを総合的に踏まえたかたちで大高康正がいくつかの「参詣曼荼羅」について個別研究を行っているが、検討すべき事例はなお多数残されている。

申請者も善峯寺や成相寺を事例として参詣曼荼羅の分析を行ってきたが、そこには「参詣」の枠にとどまらない多様な情報が含まれていることが分かってきており、今後はフィールドワークと文献の読み込みをともなうより緻密な分析が必要であると思われる。

また巡礼のネットワークを組み込むかたちで図化したものとして「三十三所観音曼荼羅」群がある。これについては藤澤隆子により種類と遺例についての基礎的な整理がなされてはいるが、観音正寺観音曼荼羅のように未解読の図もあり、巡礼の構造と変遷を考えるうえでも今後本格的な検討が求められる図群といえよう。

さらに近世に入ると各札所で巡礼者用の案内図が作られたり、各種案内記に札所図が掲載される場合も少なからず見られるようになるが、このような近世巡礼図についての考察は、昭和46年に清水谷孝尚が目録を作成した程度であり、絵図史料(群)としての整理と考察は急務であるといえる。

2. 研究の目的

本研究は、「参詣曼荼羅」、三十三所観音曼荼羅、近世巡礼案内図などの巡礼絵図史料について詳細な読図を行い、巡礼霊場の空間構造

を明らかにするとともに、さらに霊場をとりまく地域の社会・空間・景観のあり方、地域間ネットワークのあり方を捉え直すことを試みるものである。また併せて巡礼関係絵図史料の所在調査と分類整理を行い、巡礼研究の基礎的基盤を形成することも目指す。

3. 研究の方法

まず基礎作業として、近年刊行されたものを中心に巡礼関連図書を購入し、論点の整理を行った。次に霊場空間・巡礼空間を描いた図面・図集、および関連する史料集の購入を行った。このなかには「両宮撰末社順拝絵図」などのように、実際に検討の基礎史料として用いた絵図も含まれている。

これらで不足する史料については、東京都中央図書館、三重県立図書館、伊勢市立図書館、神宮文庫などを訪れ、史料の閲覧および蒐集を行った。

また巡礼空間の理解においては現地を訪れて実際に建築遺構を見て古道を歩くことも不可欠であり、複数回にわたり現地調査も行った。

4. 研究成果

計画当初に挙げたテーマのうち、参詣曼荼羅については時間の関係であまり進展しなかったが、その他のテーマについては有益な成果(原稿提出済みの未刊行書籍も含む)を挙げることができた。以下、発表順に概要を示したい。

(1) 中近世の都市巡礼に関する研究

日本における著名な巡礼である西国三十三所巡礼や四国八十八所遍路などは総距離が1,000kmを超えるような長大な巡礼であり、困難を伴ったため、全国各地には三十三所ないし八十八所を空間的に凝縮した、地方巡礼ないし写し巡礼が多くつくられた。そのうち巡礼の範囲がある特定の都市域と重なるものを都市巡礼と名付けて考察を行った。

都市巡礼のうち最も古いものは、13世紀後半から14世紀前半頃に成立したとみられる洛陽三十三所巡礼である。これは京都の市街地の外縁部を時計回りに一巡するもので、戦国期に一度廃絶したのち、17世紀中頃に再興がなされた。この巡礼はちょうど京都という都市を一周できる手軽な規模だったこともあり、とくに若者を主体に広く受容され、藝能のテーマにもなるほど、京都の都市認識の一部を形成することになった。

この都市巡礼のモデルは他都市にも普及し、17世紀末には江戸にも三十三所巡礼が成立する。江戸の場合は都市域のスプロールが顕著であったために都市の一巡の範囲が時代を追うごとに変わり、したがって巡礼も札所も乱立することになる。とくに四国八十八所を写した御府内八十八所は一周113kmにも及ぶ長大なものであった。この御府内八十八所を描いた「弘法大師御旧跡写八十八ヶ所略

図」(東京都中央図書館所蔵)はその案内図であるが、札所の番付と巡拝順が分離独立していることが分かる非常に興味深い絵図史料である。

(2) 神宮末社選拝所の研究

近世の伊勢参宮ガイドブックである『伊勢参宮名所図会』の外宮と内宮の図には、正宮の脇に四十末社・八十末社とよばれる小規模な建物群が描かれている。これは神宮境内にいながらにして神宮の撰末社を選拝できるようにする末社選拝所であった。これらは明治初年に撤廃されて今では全く痕跡をとどめていないが、これもいわば「写し巡礼」の空間として興味深く、神宮文庫に所蔵される各種境内図を用いて空間的な検討を行ったものである。

図面に描かれている選拝所の配置を比較検討すると、これら選拝所は式年遷宮で正宮が移転するさいに移動されていたこと、また配置にも厳密な規範はなく、仮設性の高い建築であったことが明らかになった。

また関連する文献史料を読み込んでいくと、これらはもと神宮の祠官が散銭収入を目的として建設したもので、17世紀に式年遷宮の余金をもとに整理が行われたこと、選拝所の管理は門前町の御師の利害と衝突する場合があったことなど、選拝所をめぐる社会構造についても知見を得ることができた。

(3) 秩父三十四所の近代化に関する研究

近世の地方巡礼の中でとくに繁栄を誇ったのは埼玉県秩父地方を範囲とする秩父三十四所巡礼であった。これはもと西国三十三所の写しとして15世紀頃に成立したものであったが、当初の三十三所の札所を一ヶ所増やして三十四所とし、西国・坂東と合わせて日本百所を構成するという言説を前面に出すことで、江戸の勃興もあいまって地方巡礼でありながら全国的な人気を誇る巡礼に成長していたのである。

ところが明治維新はこのような秩父巡礼の繁栄の根幹を揺るがすことになる。まず神仏判然令や修験道禁止令により、秩父三十四所の中で重要な役割を果たしてきていた妙見宮関係の札所や修験系の札所が廃絶を余儀なくされる。また明治11年には秩父市街地を大火が襲い、これが衰退に追い打ちをかけた。これにより秩父三十四所は一気に冬の時代を迎え、松浦武四郎の『乙酉後記』や野原剛堂の『秩父案内記』には廃墟と化しつつあった札所のすがたが描かれている。

一方でその中でも札所を死守しようとする動きはささやかながら見られ、かつての檀徒が廃絶した札所の復活に向けて動いたり、またいくつかの札所ではツーリズムと連携することで新たな生き残りの道を模索しようとしていた。筆者が入手した「秩父札所案内図」と題された一葉の絵図は、昭和2年に秩父観音講連合事務所慈眼寺が作成頒布した

案内図であり、ここには秩父三十四所再生前夜の札所の姿を見出すことができる。

(4) 観音寺観音曼荼羅から見る中世の西国三十三所の研究

日本における三十三所巡礼の元祖である西国三十三所は、信頼できる史料としては、『寺門高僧記』に記される、応保元(1161)年の三井寺僧覚忠の巡礼を嚆矢とする。この三十三所巡礼は、構成札所自体は現代のものと共通するものの、巡拝順は異なっており、現代のルートに一本化されるまでにはいくつもの異なる巡礼ルートが存在していたことが分かってきている。

現西国三十三所 32番札所である観音正寺には、三十三の観音像を配した中世の観音曼荼羅が残されているが、この観音像の配置は作成当時の巡礼ルートを含みこんでいると考えられる。先行研究ではこの配置を現代のルートとの整合性で解釈しようとしてきたが、ここではむしろ成立期とも現代とも異なるルートの存在を示す史料として読み直し、新たな読解方法の提案を行った。ここではまた重要な図像として配される聖徳太子の図像についても解釈を加えており、観音曼荼羅全体の読み方として説得力ある読解案が提示できたと考えている。研究成果については『中世の地形と移動(仮称)』(東京大学出版会)において発表予定である(脱稿済み)。

(5) 近世伊勢撰末社順拝に関する研究

研究成果(2)と対をなす研究である。近世の伊勢神宮撰末社は神宮宮域内から選拝の対象となっていた一方で、とくに伊勢山田などの住民の間では実際の撰末社を巡拝してまわる撰末社詣が盛んになっていた。そのため作られたものが「両宮撰末社順拝絵図」などの案内図であり、『両宮撰末社独案内』などのガイドブックであった。

伊勢神宮の撰末社は中世に最盛期を迎えていたが、戦国の争乱のなかで多くは廃絶に追い込まれていた。そこで17世紀に入って伊勢神宮は実地調査を行って多くの撰末社の再興を行ったが、その考証は不完全さもあって、それ以後伊勢地方の国学者たちの間では重要な考証のテーマとされた。順拝絵図や独案内もそうした考証のうえでの私案として作成されたものであって、こうした絵図からは、当時の伊勢の人々が自分たちの暮らす「神の空間」をどのように認識していたかを明瞭に示してくれているのである。

研究成果については『描かれた都市と建築(仮称)』(昭和堂)において発表予定である(脱稿済み)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 3 件)

岩本馨ほか、昭和堂、日本風景史、2015 年、177-209 頁(第 6 章 近世の都市巡礼 京と江戸における札所巡り)

岩本馨ほか、竹林舎、仏教美術論集 7 近世の宗教美術 領域の拡大と新たな価値観の模索、2015 年、405-424 頁(神宮末社選擇所と伊勢)

岩本馨ほか、日本建築学会、危機に際しての都市の衰退と再生に関する国際比較 [若手奨励]特別研究報告書、2015 年、129-134 頁(都市における文化の危機 秩父巡礼を事例として)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩本 馨 (IWAMOTO, Kaoru)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・講師

研究者番号: 00432419

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: